



Title	第二言語英語使用者の語彙に関する認識的スタンス
Author(s)	シーゲル, 亜紀
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2020, 2019, p. 19-27
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/77030
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

第二言語英語使用者の語彙に関する認識的スタンス

シーゲル 亜紀

1. はじめに

言い間違い、語彙のうっかり忘れ、このようなことは母語（第一言語）でも起きることである。人や場所の名前は然り、動詞や普通名詞が思い出せないこともある。しかし、第二言語で言い間違いをしたり、語彙がでてこなかったりするときはその語彙を「習得できていない」と会話テスト等で減点評価されてしまうことがある（e.g., IELTS, 2015）。第二言語の言い間違いや語彙忘れは本当にその語彙を習得できていないということなのだろうか。また、自然発生的会話で語彙を忘れたり間違えた場合、どのように会話内で対応されるのだろうか。本稿は第二言語語彙を忘れた、言い間違えた、ということがどのように自然発生的会話内で表現され、対応されているのかを連鎖分析（Sacks, Schegloff, & Jefferson, 1974）、そして認識的スタンス（Heritage, 2013）の観点より分析する。

2. 認識的スタンスと第二言語語彙

2.1 認識的スタンス

認識的スタンス（epistemic stance）とは相互行為の話者間における知識とその事柄に言及する権限の相対的な立場の表示や態度のことを指す。Heritage (2012a) は、話者間にはある事柄についてより知っている(K+)からより知らない(K-)とする相対的な知識権限(relative epistemic access)が存在するとしている。そして、相互行為内において認識的スタンスと情報の授受は緻密かつ公に管理されているとしている。また、Heritage (2012b) は認識的スタンスと認識的ステータスを区別し、認識的スタンスは発話時において表示される態度である一方で、認識的ステータスは社会的関係において継続的に存在する立ち位置の表示だとしている。

さらに、Raymond and Heritage (2006) は会話参加者の相対的な認識的スタンスを分析することにより話者のアイデンティティも見えてくるとしている。彼らが挙げる事例では、祖母が自身の孫に関する知識が自分の友人よりもある(K+)ということを表示することにより、孫の所有権(ownership)と祖母としてのアイデンティティを表示しているとしている。つまり、認識的スタンスと社会的アイデンティティは強く関連しており、「認識はアイデンティティ付随の知識である」(Raymond & Heritage, 2006, p. 678, 著者訳)。

一方で、Drew (2018)は相互行為中の認識性の調整（epistemic amendments）を指摘している。話者は発話途中、もしくは聞き手の沈黙の後に発話形式を変えることで自らの認識的スタンスをK+からK-へ、もしくはK-からK+へ調整することがある。

2.2 第二言語使用と認識的スタンス

第二言語習得と認識的スタンスについてはさほど多くの研究はされておらず、認識的スタンスに着目した第二言語発達追跡の可能性（Siegel, 2015）や、教室における教師と生徒の認識的スタンスの確認や表示方法（Sert, 2013; Sert & Walsh, 2013）についての研究に留まっている。しかし、言語を「知っている」という態度は使用言語に対する自信と所有権（Norton & McKinny, 2011）に通じており、相互行為を通じて表示している態度は第二言語習得の観点からみて大切である。

Norton らの研究によると第二言語に対する所有権を持つことは言語使用コミュニティへの参加およびさらなる言語発達につながるとしている(Norton & McKinny, 2011)。

第二言語習得、特に語彙の機能的知識の習得は「第二言語の単語への自動的アクセスおよび解釈の発達として概念化できる」(Elgort & Nation, 2010, p. 96, 筆者訳)。つまり、第二言語語彙を習得した証は、滞りない単語の理解と産出であるという理解である。第二言語語彙習得の調査は認知言語学的視点を使用した実験調査によるものが多く行われてきたが、最近では第二言語語彙習得の過程と結果を会話分析を使用して分析する研究も増えてきた (e.g., Hauser, 2013; Jung, 2004; Markee, 2008; Svennevig, 2018)。

しかし、会話分析を使用した自然発生的会話の縦断的な調査においても認知言語学と似たような言語発達に対する視点が使用されている。つまり、これらの会話分析を使用した研究においても、時系列上において特定の語彙を「知らない」もしくは「使用できない」という時点に比べ、次の時点において「理解を表示している」、「使用している」ことにより使用者がその「語彙を習得している」という解釈をしている。例えば、Markee (2008) は教室授業で生徒が最初はpre-requisiteという単語を知らないという表示があったが、この語を学び、のちに単独で使用していた例を報告している。また、職場という環境においても交わされる会話内で起きた言葉探しを通して語彙習得が起きることも報告されている (Svennevig, 2018)。これらの研究は修復連鎖を通してどのように新たな語彙を学んだり、思い出したりしているかを見るのには有効である。

しかし、昨今の複雑系 (complexity theory) と第二言語習得の研究によると言語習得は直線的ではなく、複雑な経路をたどるという合意に至りつつあり (e.g., Larsen-Freeman & Cameron, 2008; Ortega & Han, 2017)、第二言語語彙習得も例外ではない。このような非直線的な習得経路をたどる第二言語語彙のうっかり忘れ、言い間違え、はどのように会話内で現れ、この現象は認知的スタンス、さらには第二言語習得の観点からどのように理解できるのだろうか。本稿は一人の日本人英語使用者が使用する一つの単語に注目し分析を行う。

3. 研究手法とデータ

本研究で用いる会話データのコーパスは一人の日本人学生 (仮名 Ami) と留学生の間で交わされた会話に基づいている。このコーパスは 17 回の会話セッションを約 2 年間に渡り収録した約 500 分の会話データから成り立っている。話者相手の留学生は計 9 名おり、複数回会話セッション参加している留学生も 3 名いる。その国籍はタイ、ベトナム、中国、韓国とアジア圏からの留学生である。そのため会話は主に共通語としての英語が使用されている。録音は話者自身が行っており、研究者(筆者)は録音現場にはいなかった。計画的な会話セッションと録音ではあったが、話者相手、会話内容や展開など話者らが自由に決めており、自然発生的である。これらの会話データを会話分析の手法 (Jefferson, 2004) に従って書き起こした。なお、本稿で使用する名前は全て仮名である。

17 回の録音セッションのうち 5 回において Ami は「experience」という単語を使用していた。しかし、2 つの事例においてこの単語の言い間違え、言葉探しが行われており、より深く分析することとした。本稿ではこのコーパスにおいて Ami が使用した単語「experience」に注目し、会話内でどのように使用されているか分析を行う。

また、分析は2段階で行われる。まずは Ami が experience を使用した会話抜粋部で何が起きているか連鎖分析 (Sacks et al., 1974) を使用して分析を行う。その後、認識的スタンス (Heritage, 2012b)の観点より会話を分析し、Ami の experience に対する認識的スタンスを見ていく。

4. 分析

抜粋1は Ami とベトナムからの留学生 Hang の間で録音された会話からの抜粋である。二人は夏休みの話をしており、Ami が Hang の具体的な活動について質問をしようとした時、Ami が言葉探しの連鎖 (Goodwin, 1983) を開始し、Hang による修復が行われる。このような修復連鎖を通して認識性の調整が起きそうだが、Ami の K+としての認識的スタンスにさほど変化がないことが見えてくる。以下では連鎖分析を使用して抜粋1を分析したのち、認識的スタンスの視点より分析する。

抜粋1

Ami Hang October

- | | | |
|----|-------|--|
| 1 | Ami: | so (.)ah:: what what things ah::: |
| 2 | | how to say that .hhh (0.3) |
| 3 | | what thing? mmm (0.5)ah::: |
| 4 | | do you like the best. |
| 5 | | I mean da (.)whats mm::: whats happen? |
| 6 | | or= |
| 7 | Hang: | =mmm |
| 8 | | (0.5) |
| 9 | Ami: | .su:::= |
| 10 | Hang: | =experience? = |
| 11 | Ami: | =du (.)↑yeah experience ↑ah:::= |
| 12 | Hang: | =ex↑perience |
| 13 | Ami: | >yeah yeah yeah< |
| 14 | Hang: | mm:: maybe I like ya'ta time |
| 15 | | when I went to fu↑ji↓san |

1-2行目で Ami は躊躇標識や繰り返し、そして「how to say」と発話することにより、言葉探しを行なっていることを示している (Goodwin, 1983)。そして、語尾を上げながら「what thing」と候補(candidate word)を提示するが (行3)、Ami は Hang の返答を待たずに質問ターンを完了させる (行3-4)。そして Ami はすぐに「I mean」と自己修復を開始し、thing を happen に置き換える自己修復を行う (行5)。しかし、happen の語尾を上げ、「or」と接続詞を使うことにより自己修復がまだ継続中である可能性を示している (行6)。これを受けて Hang は先に進む促し (continuer) を示す (行7)。しかし、Ami からさらなる自己修復は行われず、息を大きく吸い、何かを思案中であることを示したところ (行9)、Hang が「experience」と理解候補(candidate understanding)を表示する (行10)。Ami は新たなターンを開始しようとしていたが、これを受け、同意と繰り返しを通して Hang の理解候補を受け入れる (行11)。そして Hang が「experience」と繰り返すことにより質問への理解を示し (行12)、再度 Ami からの同意を得る (行13)ことで質問への回答を開始している (行14-15)。これにより双方が相互理解に至ったことが見受けられる。

連鎖分析の視点よりこの抜粋の相互理解に至る形跡を見ると、冒頭で Ami は言葉探しを開始し (行1-2)、Hang の補助 (理解候補の提示) (行10)により言葉探しを完了し、相互理解に至ったと分

析することができる。つまり、Hangの方がAmiに比べ英語単語の知識があるように見受けられる。しかし、単語に関する認識的スタンスの視点より分析を行うと少し異なる状況が見えてくる。以下は抜粋1を再度認識的スタンスより再度分析する。

行1-2にてAmiは言葉探しを開始し、探している表現に関してK-のスタンス示している。しかし、AmiはHangに助けを求めるのではなく、独りで言葉探しを完了させている(行3-5)。そして、自己修復を一度完了しながらも(行3)Hangからの回答が得られるまでさらに自己修復を試みている(行5-6)。連鎖分析において自己修復は他者修復より優先される(Schegloff, Jefferson, & Sacks, 1977)ことは知られており、この連鎖もこの優先順位に当てはまる。しかし、スタンスの視点から見ると、単に優先順位に従っているのではなく、トラブル源が解決するまで、つまり話者相手の理解が得られるまで修復を行う、Amiの自己発話によるトラブルへの責任(Robinson, 2006)の表示とみることができる。そして、言葉探しを開始しているが、第二言語において多様な言い回しを行い、独自にターンを完了させることにより第二言語能力を持っていること、つまりK+のステータスであることをAmiは表示していると解釈することが出来る。

また、行11においてAmiはHangの理解候補に対して同意を示し、「Ah」と状態の変化(change of state) (Heritage, 1984)を示している(行11)。Heritage (2012a)は状態の変化はK-からK+への変化であると説いている。つまり、Amiはここで「experience」という単語に関してK-からK+へ認識的スタンスが変化したと解釈できる。しかし、Amiはexperienceの意味を問わず、Hangが再びexperienceというと「yeah yeah yeah」と早口で同意を示し会話を進めようとしている(行12-13)。これらより、Amiにとってexperienceは新しい単語なのではなく、「思い出した」もしくは「気づいた」ことを示している。つまり、Amiはexperienceという単語に関してK-からK+への認識的スタンスの変化を見せつつも、以前からその単語を知っていたこと(K+)を示すことにより英語話者としてのK+のスタンスを維持していると解釈することができる。つまり、英語話者として英語への知識権限を示していると考えられるのである。

同様の事例が他の録音でも見受けられた。抜粋2はAmiと韓国からの留学生Sooとの間で取り交わされた会話からである。二人は冬休み中に寮に残るかどうかにについて話している。そしてAmiがexperienceを間違えてexplainと言いSooが修復開始を行なっている場面である。抜粋2も連鎖分析を行なったのち、認識的スタンスより分析を行う。

抜粋2

Ami Soo December

- | | | |
|----|------|---|
| 1 | Ami: | =>bu'< I think ah dat (0.5) mm you can sstay |
| 2 | | in ei pee house?(.)duarin da: (0.3) ah: |
| 3 | | winter vaca:tion? maybe you <u>can</u> explain: |
| 4 | | ↓da (.) >you will<(.) ah >you will< explain da |
| 5 | | (.) >°how to say°< (.) the (0.4) |
| 6 | | <new years festival?> like dat (.) |
| 7 | | [in ei pee house?] |
| 8 | Soo: | [°mmhh° ((nod))](.)°mmhh° |
| 9 | Ami: | my frie:nds will be:: (.) staying in |
| 10 | | ei pee house |
| 11 | Soo: | [°mmh mmh° |
| 12 | Ami: | [during da (.)winter vaca:tion |
| 13 | Soo: | °mmhh° |
| 14 | Ami: | (0.4) to explain da: win-(0.5) |

15 da festiva:l(0.5)°new years ↓day°=
16 Soo: =but you mean dat explain:
17 (1.0)
18 Ami: [explain
19 Soo: [explain?=
20 Ami: =ya (.) expla:in
21 Soo: explain to who?
22 (1.1)
23 Ami: >no< ex (.) AH: my (.) my friend?
24 (.) will be ah: >how to say<(.)
25 will stay in ei pee house to: eh explain?
26 (0.5)
27 Ami: explain means(.) °like° ↑try ↓to: (0.4)
28 try to: do some↑thing like [er:
29 Soo: [experience?
30 (0.5)
31 Ami: °expe° >↑ya< experience [↑\$sorry:\$
32 Soo: [↓°ah:°
33 Ami: °experience ya°
34 Soo: °hmm:°

行1-7においてAmiは抜粋1同様に躊躇標識、繰り返し、「how to say」など言葉探しが行われていることを示唆しつつも独自にターンを完了する。そして、Sooからの先に進む促し(continuer)を交えながらAmiはさらに話を続ける(行8-15)。しかし、行16にてSooが他者修復を開始し、行3と4のAmiの発話に遡って「explain」がトラブル源であることを示している。1秒の沈黙ののち、二人は同時に「explain」と言う(行17-18)。しかし、同じ発話でも発話の方法の違いによって志向の違いが見えてくる。Amiは繰り返すことで、explainで合っていると確認したのに対し、Sooは上昇調の「explain」であり、explainに問題があることを再度伝えている。そして、行20でAmiは再び「explain」と繰り返し、Sooの問いへの確認を示す。このAmiの単語のみの繰り返しによりAmiはSooの修復開始をAmiの語彙選択に関する問題ではなく、Sooの理解確認もしくは聴覚確認用の修復として理解していることがわかる。しかし、Sooはより具体的な質問に変えることによりまだ問題が解決していないことを示し、再度他者修復を開始する(行21)。しかし、Amiは「explain」を使用し、行1-7同様の発話内容を繰り返し(行23-25)、さらにはexplainの語義を提示する(行27)。そこでSooは「experience」と理解候補を示す(行29)。Amiはそこで気づきを示し(「ya」)、笑いを含んだ謝罪「sorry」を行い、「experience」と繰り返すことにより、Sooによる他者修復を受け入れている(行31、33)。そして、AmiとSooが相互理解に至ったと言える。

この抜粋を連鎖分析の視点から分析すると、Amiの英単語の誤用により他者修復が開始されSooの理解候補・修復により相互理解が得られたと見ることができる。そのためAmiの語彙力がSooに比べ劣っているように見受けられる。しかし抜粋2を認識的スタンスから分析すると少し違う様子を伺うことができる。以下ではAmiの認識的スタンスに着目して再度分析を行う。

Ami は行 1-7 において沈黙、躊躇、上昇イントネーション、「how to say」などを使用し言葉探しが行われている様子を見せつつも独自にターンを完了させている。また、「how to say」は explain の後に使用していることから探していたのは試行標識 (try-marker) (Sacks & Schegloff, 1979) の付いた「new years festival」だとわかる。そのため、explain の使用に関しては何ら問題を見せていない。つまり、explain (実際には experience) の語彙に関して K+ のスタンスであることを示している。そして、行 16 にて Soo が「explain」をトラブル源として取り上げた際、自らの発話

問題ではなく、Soo の聞き取りの問題として取り扱っていることから、この時点においてもまだ K+のスタンスを示している。行 19 において Soo が再び explain について問うと、Ami はまずは話の内容を繰り返し、次に語義を提示している。このことより、Ami が K+のスタンスを維持し、逆に Soo を語義がわからない K-の立場に位置付け (positioning) していると言える。そして語義を説明することによりその語彙を知っていると言う自信も表示していると理解することができる。同時に、トラブル源となった発話の(説明)責任 (Robinson, 2006) を示しているとも理解することができる。

行 29 で Soo が「experience」の理解候補を提示すると、Ami は沈黙し、部分繰り返しで考えていることを提示したのち「ya」と同意を示し、「experience」と繰り返す。ここでのやり取りは抜粋 1 と同様に、さらなる修復連鎖が開始されないことから Amiにとって experience が新しい言葉ではないことがわかる。そして、Ami は笑いを含んだ謝罪をする。この笑いは間違いからの恥ずかしさ、もしくは自嘲的な笑いと見ることもできる (Wilkinson, 2007)。いずれにしても、笑いにより謝罪は深刻なものではないことが示されている。そして、行 33 の繰り返しも小さな声で行なっている。これらより Ami は間違えたという面子の喪失、さらには言い間違えたと言う認識的スタンスの K+から K-への変化を最小限にとどめている。

このように、抜粋 1 と 2 で Ami は、experience という単語を使用できなかつたり誤用したりと、まだこの単語を学んだばかりかのように見える。しかし、これらの録音の数ヶ月前(6月と7月)には何の問題もなく、同じ話者相手 (Hang と Soo) に対して experience を使用しているのが確認されている(抜粋 3 と 4 参照)。(抜粋 1、2 は同年の 10 月、12 月に録音された。)

抜粋 3

Ami Soo June

- | | | |
|---|------|-------------------------------------|
| 1 | Ami: | =because they: (.) [experienced (.) |
| 2 | Soo: | [°uh::° |
| 3 | Ami: | the ↑wahr |
| 4 | | (0.5) |
| 5 | Soo: | ya ↓ya= |

抜粋 4

Ami Hang July

- | | | |
|---|-------|--|
| 1 | Hang: | yeah |
| 2 | Ami: | but she:: she ha has a good experience |
| 3 | Hang: | yeah |
| 4 | Ami: | mm |

抜粋 3 と 4 では多少の間や躊躇は見られるが、experience の単語そのものは滞りなく正しく会話内で使用され、会話は自然に取り交わされている。これらの抜粋 3、4 のみを見ると Ami は experience という単語を知っているという判断ができるであろう。それでは、抜粋 1 と 2 での Ami は experience を忘れてしまったのだろうか、言語喪失・減退 (language attrition) (Weltens & Cohen, 1989) が起きているのだろうか。これは本研究の範囲外で本データのみからでは答えられない。しかし、着目したいのは Ami の experience という単語に対する K+の認識的スタンスにほぼ変わりはないという点である。

4. 考察

Heritage (2012b)が示しているように、知識権限は相互行為を通して公に示され、認識的スタンスは常に話者間で管理されていることが本稿のデータでもみられた。また、同じ会話であっても連鎖分析と認識的スタンスに着目した分析の間では多少の差がある可能性が見えてきた。

連鎖構造だけを見ると、Amiには言葉探しの連鎖や語彙の誤用がみられ、話者相手の理解候補のより相互理解が得られた状況であった。ゆえに、話者相手の方が第二言語である英語が優れており、話者相手の補助により相互理解に到達できたと一見解釈できる。このような言葉探しや誤用はIELTSの口頭試験の評価基準に照らし合わせると減点対象となる (IELTS, 2015)。

一方で、抜粋1と2の認識的スタンスを分析すると、Amiは言葉探し連鎖を独りで完結させ、語義を説明し、すぐに修復に対して理解を示し、第二言語語彙のexperienceに関してK+であるとする知識権限についてほぼ変化が見られなかった。つまり、Amiはexperienceという語彙に対する所有権を表示しているということが出来る。

第二言語語彙習得に関しては伝統的に認知言語学的に個々の学習者の語彙の形・機能・意味等の受容能力と産出能力に関して調査・分析されてきた (Nation, 2001)。そのため、第二言語語彙習得・使用に関して知識権限の視点より論議されることはほぼない。しかし、自らの語彙選択に対して自信と自己発話によるトラブル源への責任を見せ、語義まで説明できるということはその語彙を習得できていると解釈できるのではないだろうか。言語能力テストはこのような認識的スタンスについては考慮しておらず、語彙の辞書的意味の受容的理解と産出に基づいてのみ評価が行われてきた。しかし、言い間違えなど第一言語などでも起こりうることを考慮すると産出言語のみにとどまらず、話者の認識的スタンスも考慮する必要があるのではないだろうか。

結論

本稿は第二言語学習者同士の相互行為を連鎖分析および認識的スタンスの視点より分析・考察を行った。連鎖分析からは、言葉の忘れ、誤用など第二言語語彙能力の後退と解釈できる変化がAmiに見られたが、認識的スタンスにはあまり変化が見られなかった。つまり、会話連鎖内ではある語彙を「知らない」者としての相互行為が見られたとしても、認識的スタンスに関しては「知っている」者としてのスタンスを維持することがあることがわかった。

言語の「習得」とはその辞書的な意味の理解・産出にとどまらず、認識的スタンスがK-からK+へ変化し、K+に留まることも含まれると考えられるのではないだろうか。言語評価に関して認識的スタンスも考慮していく可能性について示唆される。本稿は一名の第二言語使用者の一語に注目して分析を行ったため、一般論としての議論はすることはできないが、今後も他の事例研究を重ね、第二言語習得と認識的スタンスの関係について議論する価値があるのではないだろうか。

参考文献

- Elgort, I., & Nation, P. (2010). Vocabulary learning in a second language: Familiar answers to new questions. In P. Seedhouse, S. Walsh, & C. Jenks (Eds.), *Conceptualising 'learning' in applied linguistics* (pp. 89-104). Palgrave MacMillan.
- Goodwin, M. H. (1983). Searching for a word as an interactive activity. In J. N. Deely & M. D. Lenhart (Eds.), *Semiotics* (pp. 129-137). Plenum.

- Hauser, E. (2013). Stability and change in one adult's second language English negation. *Language Learning*, 63(3), 463–498. doi:10.1111/lang.12012
- Heritage, J. (1984). A change-of-state token and aspects of its sequential placement. In J. M. Atkinson & J. Heritage (Eds.), *Structures of social action: Studies in conversation analysis* (pp. 299-345). Cambridge University Press.
- Heritage, J. (2012a). The epistemic engine: Sequence organization and territories of knowledge. *Research on Language and Social Interaction*, 45(1), 30-52.
- Heritage, J. (2012b). Epistemics in action: Action formation and territories of knowledge. *Research on Language and Social Interaction*, 45(1), 1-29.
- Heritage, J. (2013). Epistemics in conversation. In J. Sidnell & T. Stivers (Eds.), *The Handbook of Conversation Analysis* (pp. 370-394). Boston: Wiley-Blackwell.
- IELTS. (2015). Speaking: Band Descriptors. Retrieved from http://takeielts.britishcouncil.org/sites/default/files/Speaking%20Band%20descriptors_0.pdf
- Jefferson, G. (2004). Glossary of transcript symbols with an introduction. In G. H. Lerner (Ed.), *Conversation analysis: Studies from the first generation* (pp. 13-23). John Benjamins.
- Jung, K. (2004). L2 vocabulary development through conversation: A conversation analysis. *Second Language Studies*, 23(1), 27-66.
- Larsen-Freeman, D., & Cameron, L. (2008). *Complex systems and applied linguistics*. Oxford University Press.
- Markee, N. (2008). Toward a learning behavior tracking methodology for CA-for-SLA. *Applied Linguistics*, 29(3), 404-427.
- Nation, I. S. P. (2001). *Learning vocabulary in another language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Norton, B., & McKinny, C. (2011). An identity approach to second language acquisition. In D. Atkinson (Ed.), *Alternative approaches to second language acquisition* (pp. 73-94). London: Routledge.
- Ortega, L., & Han, Z. (Eds.). (2017). Complexity theory and language development. *Celebration of Diane Larsen-Freeman. Benjamins, Amsterdam*.
- Raymond, G., & Heritage, J. (2006). The epistemics of social relations: Owning grandchildren. *Language in Society*, 35(5), 677-705. doi:10.1017/S00474045060060325
- Robinson, J. D. (2006). Managing Trouble Responsibility and Relationships During Conversational Repair. *Communication Monographs*, 73(2), 137-161. doi:10.1080/03637750600581206
- Sacks, H., Schegloff, E., & Jefferson, G. (1974). A simplest systematics for the organization of turn-taking for conversation. *Language*, 50(4), 696-735.
- Sacks, H., & Schegloff, E. A. (1979). Two preferences in the organization of reference to persons in conversation and their interaction. In G. Psathas (Ed.), *Everyday language: Studies in ethnomethodology* (pp. 15-21). Irvington Publishers.
- Schegloff, E., Jefferson, G., & Sacks, H. (1977). The preference for self-correction in the organization of repair in conversation. *Language*, 53(2), 361-382.
- Sert, O. (2013). Epistemic status check as an interactional phenomenon in instructed learning settings. *Journal of Pragmatics*, 45(1), 13-28.
- Sert, O., & Walsh, S. (2013). The interactional management of claims of insufficient knowledge in English language classrooms. *Language and Education*, 27(6), 542-565. doi:10.1080/09500782.2012.739174

- Siegel, A. (2015). Social epistemics for analyzing longitudinal language learner development. *International Journal of Applied Linguistics*, 25(1), 83-104. doi:10.1111/ijal.12052
- Svennevig, J. (2018). “What’s it called in Norwegian?” Acquiring L2 vocabulary items in the workplace. *Journal of Pragmatics*, 126, 68-77. doi:https://doi.org/10.1016/j.pragma.2017.10.017
- Weltens, B., & Cohen, A. D. (1989). Language attrition research: An introduction. *Studies in Second Language Acquisition*, 11(02), 127-133.
- Wilkinson, R. (2007). Managing linguistic incompetence as a delicate issue in aphasic talk-in-interaction: On the use of laughter in prolonged repair sequences. *Journal of Pragmatics*, 39(3), 542-569.

文字書記号一覧

. word 息を吸いながら言われた語